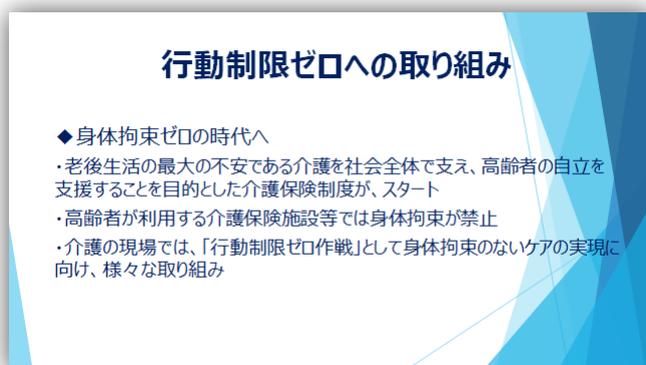


行動制限（身体拘束）ゼロ への取り組み

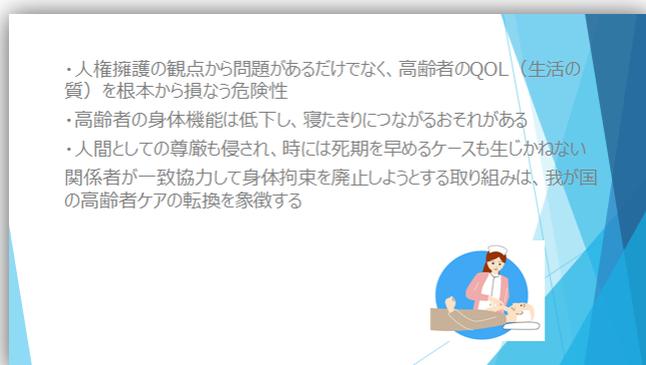
発表者用原稿

行動制限（身体拘束）ゼロへの取り組み



◆行動制限ゼロの時代へ

老後生活の最大の不安である介護を社会全体で支え、高齢者の自立を支援することを目的とした介護保険制度が、スタートした。それに伴い高齢者が利用する介護保険施設等では行動制限が禁止され、介護の現場では、「行動制限ゼロ作戦」として行動制限のないケアの実現に向け、様々な取り組みが進められています。



行動制限は、人権擁護の観点から問題があるだけでなく、高齢者の QOL（生活の質）を根本から損なう危険性を有しています。行動制限によって、高齢者の身体機能は低下し、寝たきりにつながるおそれがあります。さらに、人間としての尊厳も侵され、時には死期を早めるケースも生じかねない。それ故に、行動制限の問題は高齢者ケアの基本的なあり方に関わるものであり、関係者が一致協力して行動制限を廃止しようとする取り組みは、我が国の高齢者ケアの転換を象徴する画期的な出来事であると言えます。

行動制限は「やむを得ない」のだろうか？

医療や看護の現場では、援助技術の一つとして、手術後の患者や知的能力に障害がある患者の治療において、安全を確保する観点からやむを得ないものとして行われてきている。



行動制限は「やむを得ない」のだろうか？そもそも行動制限は、医療や看護の現場では、援助技術の一つとして、手術後の患者や知的能力に障害があります患者の治療において、安全を確保する観点からやむを得ないものとして行われてきています。

高齢者ケアの現場では…

- ・高齢者の転倒・転落防止など
 - ・弊害を意識しながらもなかなか廃止できないジレンマ
- 「縛らなければ安全を確保できない」と自らを納得させること
抵抗感を次第に低下させている
「緊急やむを得ない場合」
「やむを得ない」と安易に行動制限を行っている



高齢者ケアの現場でも、その影響を受ける形で、高齢者の転倒・転落防止などを理由に行動制限が行われてきました。そして、現場のスタッフは、行動制限の弊害を意識しながらもなかなか廃止できないジレンマの中で、「縛らなければ安全を確保できない」と自らを納得させることにより、行動制限への抵抗感を次第に低下させていますのではないのでしょうか。実態を見るならば、介護保険施設等では真に「緊急やむを得ない場合」として行動制限を行っていますケースは少なく、むしろ行動制限に代わる方法を十分に検討することなく、「やむを得ない」と安易に行動制限を行っているケースも多いのではないのでしょうか。

行動制限を許容する考え方を問い直そう

高齢者の家族の同意により許容

その同意は家族にとって、

他に方法のないやむを得ない選択

縛られている親や配偶者を見て、家族が混乱し

苦悩し、後悔している姿



行動制限を許容する考え方を問い直そう行動制限を行う理由として、高齢者の家族の同意により許容されるという意見があります。確かに、家族が施設や病院側の説明を聞き、行動制限に同意する場合もあるでしょう。しかし、その同意は家族にとって、他に方法のないやむを得ない選択であったこと、そして縛られている親や配偶者を見て、家族が混乱し、苦悩し、後悔している姿を、我々は真剣に受け止めなければなりません。

行動制限が廃止できない理由

「スタッフの人数不足」

現実には・・・

様々な工夫をしながら行動制限を廃止している施設や病院はある

一方で、それを上回る体制にありながら行動制限をしている施設や病院も少なくない

スタッフの人数をめぐる議論はかつて欧米でもあった

行動制限をすることによって高齢者の状態がより悪化し、より人手が多くかかる」という識者の意見

また、行動制限が廃止できない理由として、「スタッフの人数不足」をあげる意見もあります。明らかな人員不足は解消しなければならないが、現実には現行の介護体制で、様々な工夫をしながら行動制限を廃止している施設や病院はありますし、一方で、それを上回る体制にありながら行動制限をしている施設や病院も少なくありません。

スタッフの人数をめぐる議論はかつて欧米でもあったと聞きます。行動制限をすることで、高齢者の状態がより悪化し、より人手が多くかかる」という識者の意見もあります。